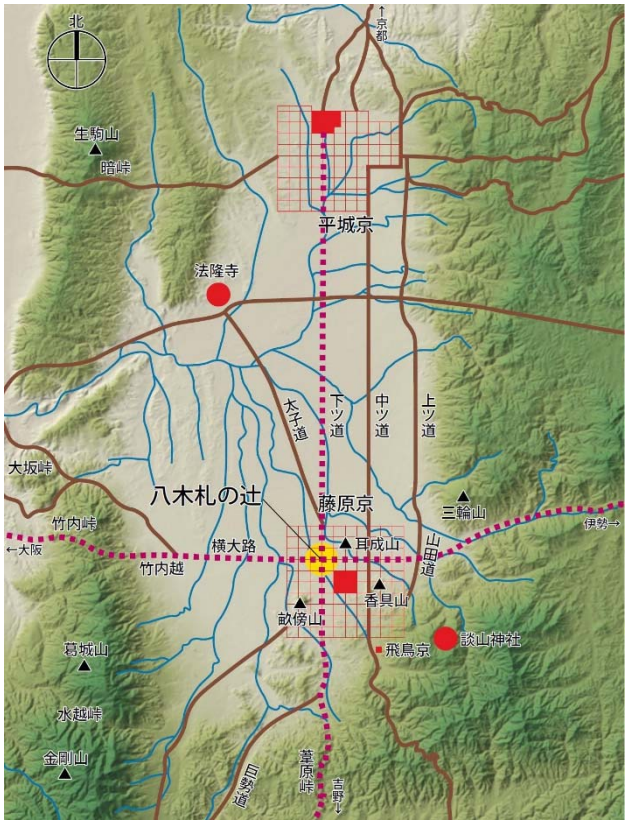
八木の概要

奈良盆地の古道と札の辻



奈良県橿原市の八木の町は古代からの幹線道路の交差点を中心に発展し、中世には町を形成していたと云われております。近世になって、高札の架かる場所となり「札の辻」と呼ばれ、商業の中心となりました。今も、この周辺には江戸時代からの歴史的な町並みが生活の場として生き続けていると共に、灯籠・井戸・旅籠の建物などの旧街道の面影をとどめる環境も残されています。また「札の辻」の往時の姿は下図の「西国名所図会」にいきいきと写し出されています。そして明治になって、八木町は鉄道駅も設置され、幹線道路も近くを通り、大和盆地中南部の中核都市として位置付けられるようになりました。

これらの歴史遺産を生かした「まちづくり」が、これからすすめられようとしています。

下ツ道と横大路

古代からの幹線道路とは飛鳥時代の古道である「下ツ道」と「横大路」のことです。下ツ道は大和盆地の中央を南北に貫く三本の古道のひとつで、東側から上ツ道、中ツ道がありました。

下ツ道の北端は平城京の朱雀大路で、平城京の区画の基本となった条里制はこの道を基準につくられました。また、この道は南に行けば、高取を越えて吉野・熊野に至る幹線でした。現在も、その痕跡ははっきり残っていて、近年復元された朱雀門からまっすぐこの「札の辻」を経て、高取に至る道を地図で見ることができます。

西国三十三所名所図会　八木札街

横大路は「札の辻」を通る東西の道で、日本書紀にもあるように大坂の難波津から竹内峠を越え飛鳥京につながる官道で、当時は 30～40m 程度の幅の、いわば現代の国道１号線とでもいえる古道です。その後も大坂から伊勢へ向かう街道のひとつ

として賑わいました。

おかげ参りと接待場（せんたいば）

近世には、「おかげ参り」の列が横大路を通り抜け賑わいました。これらの人たちを助けるために、町の人たちが施行として食事や湯茶の接待をしました。その場所は「せんたい場」と呼ばれ、その跡は長い間町の人たちによって大事にされてきました。「せんたい場」の様子は、図のように、当時の町の絵師によっていきいきと描かれています。

せんたい場絵図（恵比須神社蔵）

「おかげ参り」とは、伊勢信仰の気持ちを押さえきれず、仕事や家庭を放棄して伊勢参りに参加した人々のことをいいます。当時からの灯籠がのこってきましたが、近年、移転を余儀なくされました。

おかげ灯籠と金比羅灯籠移転後のおかげ燈籠

札の辻を通った人々

松尾芭蕉、本居宣長、吉田松陰など多くの人達がこの街道を通過し「札の辻」に足跡をのこしています。芭蕉はここで泊まり次の一句を詠んだと『笈の小文』の中でのべています。「草臥て宿かる此や藤の花」

八木地区公民館前にある松尾芭蕉の句碑

本居宣長は『菅笠日記』の中で吉野からの帰途、「札の辻」で当麻に行こうか、奈良見物をしようかと迷ったが、結局松阪に帰ったと記しています。吉田松陰は私淑していた八木の儒学者谷三山に会いに萩からやってきてその後江戸に向い、のちに安政の大獄で処刑されています。

札の辻に残ったもの

井戸と旅籠は名所図会に描かれていますが、井戸の一部は車通行のため削られましたが、今も水が涌いています。その横の旧旅籠は手摺から旅人が顔を覗かせそうな雰囲気を残しています。

環濠跡

郵便マークの瓦と札の辻の井戸

札の辻の北側

札の辻の北側は土蔵まで道が広がっています。これは市が開かれたなごりです。この町は中世には環濠で自衛していた痕跡が残っています。また珍しい瓦や駒繋ぎなど町を歩きながら探して下さい。

下ツ道　東の平田家の 2 階からみる愛宕祭の様子